

令和4年6月の現況と7月の対策（果樹）

5月の実況（6月実況は次月掲載）

5月の日照時間は217.9時間で平年（191.1時間）比114%と多かった。降水量は95.5mmで平年（139.1mm）比69%と少なかった。最高気温極値は32.0℃（30日）、最低気温極値は7.4℃（2日）であった。月平均気温は18.5℃で平年（18.1℃）よりやや高かった。最大瞬間風速15m/s以上の強風は26日・30日の2日記録された。

[以上、福井地方気象台観測データによる]

1 ウメ

(1) 生育状況（園芸研究センター）

「紅サシ」の累積生理落果数は、平年、前年よりも少なく推移した(図1)。

胚固完了期は5月27日で、前年より2日遅く、平年より1日早かった(表1)。6月17日現在の果実横径は37.9mm（平年38.1mm、前年38.5mm）で、平年、前年並みに推移している(図2)。

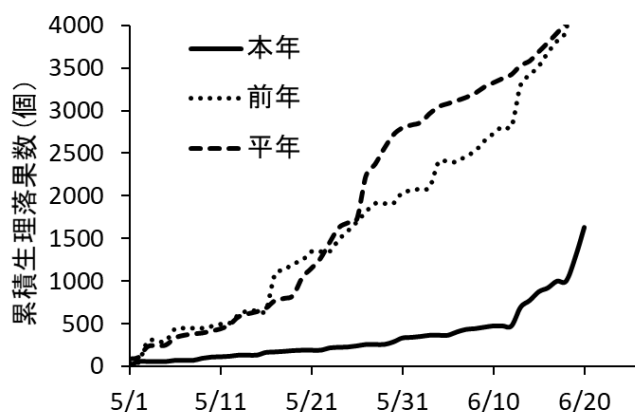


図1 「紅サシ」の累積生理落果数の推移

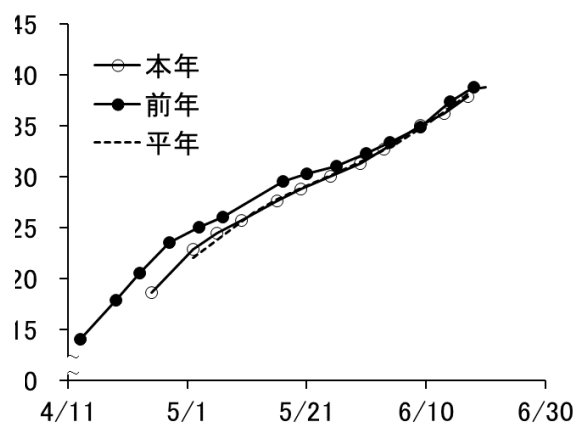


図2 「紅サシ」の年度別果実肥大

表1 「紅サシ」の年度別発育ステージ

年度	短果枝花芽 (個/cm)	完全花率 (%)	結実率 (%)	開花期 (月/日)			開花日数 (日)	硬核期 (月/日)		胚固化期 (月/日)	
				始期	盛期	終期		始期	完了期	始期	完了期
2022	1.80	65.9	70.8	3/6	3/15	3/25	20	4/30	5/13	5/17	5/27
2021	1.70	67.9	62.6	2/15	3/3	3/17	32	4/30	5/7	5/11	5/25
2020	1.58	74.3	31.4	2/5	2/19	3/4	29	4/24	5/5	5/12	5/29
2019	1.86	63.3	46.8	2/13	3/4	3/18	35	5/3	5/7	5/14	5/27
2018	1.94	82.5	51.8	3/4	3/15	3/23	20	5/1	5/8	5/11	5/25
平年値(2012-2021)	1.75	74.0	49.7	2/23	3/10	3/22	28	5/1	5/9	5/15	5/28

(2) 地域状況

着果量は前年・平年より少ない。

広域選果場は、「剣先」が6月2日、「紅サシ」が6月9日、「福太夫」が6月15日、「新平太夫」が6月21日から取り扱いを開始し、7月4日まで集荷される計画である。

2 ナシ

(1) 生育状況 (農業試験場)

6月21日現在の果実横径は、「幸水」が40.8mm(平年41.0mm、前年40.4mm)で、前年、平年並みに推移している(図3)。「豊水」は38.6mm(平年38.9mm、前年37.3mm)で、前年より大きく、平年並みに推移している(図4)。

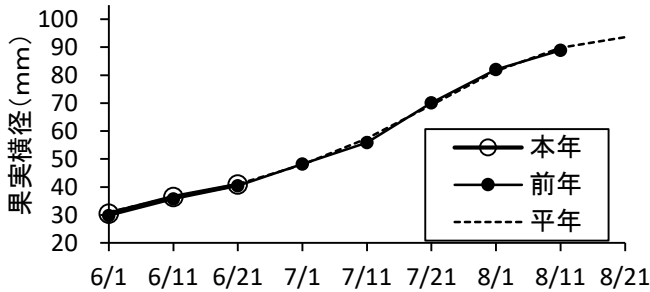


図3 「幸水」の果実肥大

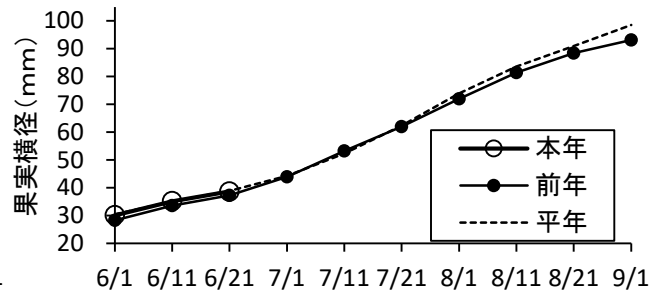


図4 「豊水」の果実肥大

(2) 地域状況

2次摘果作業がほぼ終了し、摘心作業が実施されている。園によっては葉柄や幼果に黒星病が発生している。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

6月21日現在の果実横径は、「刀根早生」が34.6mm(平年32.1mm)、「平核無」が34.5mm(平年32.5mm)であり、両品種ともに平年より大きい(図5、6)。

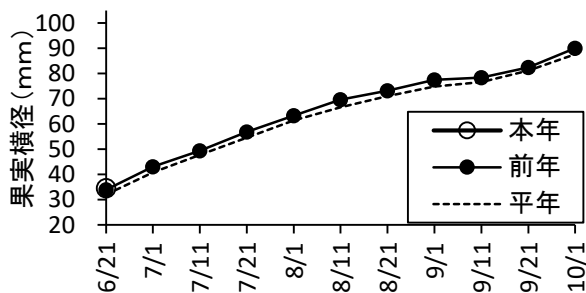


図5 「刀根早生」の果実肥大

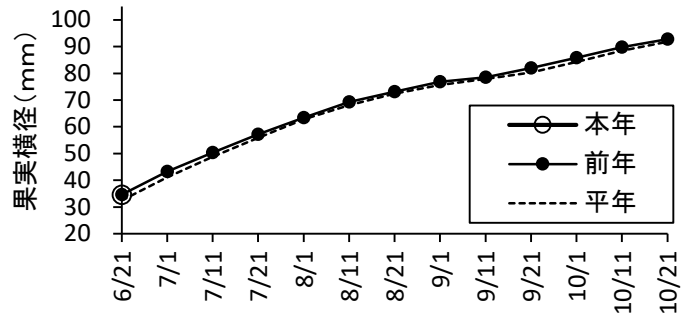


図6 「平核無」の果実肥大

(2) 地域状況

坂井管内および南越管内の着果は良好である。

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭管内では、6月22日時点の展葉数は17枚程度で、結果枝の誘引作業は終了している。

5 ブドウ

(1) 生育状況(農業試験場)

場内の露地栽培におけるジベレリン処理は、表2の時期に実施した。

表2 品種別ジベレリン処理時期(中心日)

品 種	1 回目	2 回目
サニールージュ	6月1日	6月10日
ブラックビート	6月1日	6月10日
藤稔	6月1日	6月10日
シャインマスカット	6月3日	6月13日

(2) 地域状況

無加温ハウス栽培におけるジベレリン処理は、1回目が5月中下旬に、2回目が5月下旬～6月上旬に行われ、前年と同時期か、やや遅かった。仕上げ摘粒、袋掛けが実施されている。早い園地では6月下旬に果粒軟化期となった。

一部の園で灰色かび病や花ぶるい症状の発生が見られた。

対 策

1 各樹種共通

(1) 排水対策(梅雨期間中)

雨が多いと土壌が過湿状態になり、酸素不足によって根が傷み、湿害が発生する。特にイチジク・ブドウ・モモ・キウイフルーツなどの樹種は、湿害が発生しやすいので注意する。

排水の悪い水田転換園では、必ず園地の内外に排水溝を設置するとともに、園地周辺の排水溝では停滞せずに雨水が流出するか点検する。

降雨後の園内に停滞水が見られる場合は、水が溜まっている場所に明きょを設け、排水に努める。スピードスプレーヤーや運搬車(軽トラック等)のわだちが水たまりになっている場合は、土入れする。

(2) 干ばつ対策(梅雨明け後)

高温乾燥が続いて土壌水分が低下すると、葉のロール・黄化落葉となって水分不足の症状が現れる。根域が十分に発達していない若木は影響を受けやすく、樹全体が枯死することもある。また、病害虫の発生にも注意が必要である。

ア かん水

梅雨明け後に高温乾燥が続く場合は、早めのかん水を心がける。無降雨が1週間程度続いた場合、1回当たり15～20mm程度のかん水を実施する。特に、砂質浅耕土、根張りの不十分な幼木や浅根性の果樹では、かん水頻度を多くする。

イ 草刈り・有機物マルチ被覆

土壌養水分の競合を防ぐため、梅雨明け後には草刈りを行う。また、樹冠下に刈草や稲わら・麦わらでマルチをすると、土壌表面からの蒸散を防ぐとともに地温を下げる効果がある。麦わらは、稲わらと比べ水を含んでも硬くならないので通気性が良く、土の表面を軟らかく保つことができる。

ウ 病害虫防除

乾燥が続くとハダニ類・スリップス類・カメムシ類などが発生しやすい。また、雑草中で害虫が増殖していた場合、草刈りによって生息場所を失い、害虫が樹体へ移動することがある。病害虫の発生状況をこまめに観察し、発生初期や草刈りに合わせて、農薬使用基準を守りながら薬剤を散布する。

2 ウメ

(1) 礼肥の施用

花芽分化は7月下旬に始まるので、この頃までに樹勢を回復させ、葉中窒素含有率を高め、来年の花芽着生の向上をはかる必要がある。礼肥の施用によって、果実生産で消耗した樹勢の早期回復と貯蔵養分の蓄積をはかる。

収穫が終わった直後の礼肥は、窒素成分で10a当たり約7kg(成木の場合)を基準とするが、葉色が薄い場合は最大10kgまで増やして施用する。ネット収穫している樹でも遅くとも7月上旬には施用する。

(2) 病虫害防除

今年、黒星病の発生が多かった園では、枝で越冬する病原菌を抑えるため、果実収穫後早期に薬剤を散布する。毎年、環紋葉枯病や葉炭そ病など落葉病害の発生が見られる園では、発生予防のために薬剤散布する。

近年、イラガ類が6月下旬から、モンクロシャチホコが8月上旬からと、それぞれの幼虫発生時期が早まる傾向にある。収穫後も定期的に園内を観察し、早期発見に努め、補殺や薬剤散布する。

(3) 「福太夫」の新梢管理

「福太夫」は新梢の発生が多く、かつ長く伸びやすい。秋冬季せん定で(昨年の)新梢を切り返し、その先端で新梢が箒(ほうき)状に発生している場合は、台風など強風雨の際に枝折れや枝の裂開が発生する可能性がある。切返しせん定をした先端部分から多数の徒長枝(新梢)が発生している場合は、上向きおよび下向きの新梢を切除(間引きせん定)し、残した新梢はその長さの60%程度を目安に切り返し、強風に備える。

また、主枝分岐部付近のふところ部分で発生して、秋冬季せん定で切除する可能性が高い徒長枝は、日焼けの発生に注意しながら、基部から切除する。

(4) 一次加工の漬け込み

収穫した果実は、ゴミや汚れを洗浄機等で水洗する。完熟落下果実はケシキスイが侵入している可能性があるので、食害痕のあるものや侵入果は必ず選別して取り除く。

塩は生梅重量の18%を基準とし、ウメと塩を交互に入れ、樽の底は塩を少なめに、上に行くほど多めの塩を振る。梅酢が上がって、液面がウメを覆うようになったら重石を順次減らしていく。

(5) 一次加工の天日干し

漬け込んで1か月ほど経過した頃から天日干しを行う。

白干梅の水分は65%を基準に、64%から67%の範囲に仕上げる。干し上がりの水分はブリックス糖度計を用いて推定することができ、100から糖度計の読み取り値を引いた値が、おおよその水分となる(糖度計で33から35が目安)。

盛夏期の強い日射条件下で天日干しした場合、果実表面の着色と乾燥だけが急激に進むため、せいろや寒冷紗等で覆って日射を和らげる。

なお、天日干しの際に「白干梅整列板」を用いることで、作業能率や品質の向上が期待できる。

3 ナシ

(1) 病虫害防除

先月に引き続き、黒星病および黒斑病の防除を徹底する。現在、黒星病の発生している園地が見られており、特に「幸水」では7月中下旬の果実でもっとも感染しやすくなるので警戒する。

園地を見回り、発病部位(特に葉柄)は見つけ次第除去し、土中深く埋める等適切に処分する。防除は、有機銅剤・グアニジン系剤・Qo I 剤等をローテーションで使い、かけ残し部分を生じないようにていねいに散布するとともに、防除間隔が空きすぎないように計画的に実施する。

また、ハダニ類は高温乾燥条件で発生が増えるため、梅雨明け後は圃場を巡回し、発生状況をよく観察する。草刈りをするとうハダニ類がナシ樹に上がってくるので、草刈りと同時に薬剤防除する。

(2) 仕上げ摘果と「幸水」の裂果対策

圃場を見回りながら順次仕上げ摘果を行う。7月は果実がもっとも旺盛に肥大する時期であり、「幸水」では裂果が発生しやすい。裂果対策として予定着果量より10%程度多く着果させているので、裂果の危険がなくなってから最終着果数(10,000果/10a)まで摘果する。

(3) 新梢誘引

腋花芽を使って着果を確保する「幸水」などの品種は、新梢伸長停止期以降(7月上旬以降)に誘引することにより、腋花芽の着生を良好にすることができる。主枝、亜主枝の側面から発生した新梢を約45度の角度に倒す。昨年残した予備枝は水平に誘引し、予備枝先端の新梢が約45度倒れるようにする。成木で1樹当たり30~50本を目安に新梢誘引する。

4 カキ

(1) 仕上げ摘果

大玉果を生産するため、摘果を徹底する。ただし、梅雨明けまでは生理落果のおそれがあるので、生理落果の状況を観察しながら、はじめは変形果・キズ果を除き、7月下旬まで徐々に摘果を仕上げていく。1結果枝につき1果に摘果してあっても、せん定程度が軽く結果枝数が多い樹では、着果過多になるので、葉果比で1果につき15葉程度を目安に摘果する。

仕上げ摘果後も、収穫まで順次見直し摘果を行う。

(2) 新梢管理

樹冠内部の通風・採光を妨げている枝や充実不良枝、骨格枝の背面から発生している徒長枝などは適度に間引く。新梢の間引き(枝かき・芽かき)は徐々に行い、枝かきしても二次伸長の恐れがなくなる8月下旬以降に、樹幹内の明るさを判断基準として枝数を調整する。

葉数が少ない老木や樹勢の弱った樹は、ねん枝により新梢を温存し、葉数を確保する。骨格枝上面から発生した徒長枝は、E型金具を徒長枝基部に取り付けて、水平に誘引し、側枝化に養成するのがよい。

(3) 追肥

樹勢が弱い樹を中心に、果実肥大を促進させるために、7月中下旬に年間施肥量の1割程度を目安に追肥する。ただし、樹勢が強く生理落果が多い樹では、この時期の追肥は行わない。

(4) 病虫害防除

害虫ではスリップス類、カイガラムシ類の防除を行う。梅雨が続くと落葉病、炭そ病が発生するので殺菌剤を混用して同時防除する。

5 イチジク

(1) 結果枝の摘心

20枚程度が展葉した頃に結果枝の摘心を行う。若木で樹勢が強い場合は、作業時期を遅らせ、8月上旬に夏季せん定で20葉を残して先端を切り返す。

(2) アザミウマ防除

アザミウマ類は、果頂部が開く時期(果実横径が25~30mmの頃)に果実へ侵入して内部を加害し、下から1~6段あたりの果実に被害が多くなりやすい。

防除は合成ピレスロイド系やネオニコチノイド系の薬剤をローテーションで使用する。耕種的防除では、シルバーマルチなどの光反射シートを樹冠下に敷くと、アザミウマ類の忌避効果がある。

6 ブドウ

(1) 袋かけ・笠かけ

袋かけは、果粉(ブルーム)をきれいに保持することに加え、日焼け防止や薬剤付着による汚れ防止などに有効である。露地・ハウス栽培ともに、できるだけ袋かけを行う。笠かけも日焼け防止に有効である。日焼け防止のための袋かけ・笠かけは、被害が出やすい果実軟化期までに行う。

(2) 新梢管理

新梢の伸長継続による果房への転流不足や果房への適度な日射による着色促進を目的に、まだ伸び続けている新梢および副梢を摘心する。摘心後の副梢が再度、伸長した場合は1~2枚を残して摘心する。強樹勢で新梢伸長が秋ごろまで旺盛な場合は、植栽間隔を広げるなどの対策も検討する。

(3) 収穫

生育の早い園の早生品種は今月から収穫が始まる。

品種によって異なるが、収穫開始は糖度18度以上、酸度0.4~0.7を目安に収穫する。

着色の進行とともに、糖度は上昇し、酸が減少する。収穫は糖度を測定しながら計画的に行い、早どりには十分注意する。